

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「未来都市」初出と書誌	—	福永武彦全集 第4巻 附録他より (新潮社)	—	1	<p>・初出:「小説新潮」昭和34年(1959)4月号</p> <p>・単行</p> <p>1.「世界の終り」初版。昭和34(1959)年6月人文書院刊。四六判、紙装、カバーつき。カバー装画:駒井哲郎。本文279頁。内容:「夜の寂しい顔」、「未来都市」、「鬼」、「死後」、「影の部分」、「世界の終り及び「後記」(著者)と著作目録。</p> <p>2.「世界の終り」新版。昭和44年(1969)9月人文書院刊。四六判、紙装、函入。函装画:駒井哲郎(1とは異なる)。本文278頁。内容は1に同じ(但し「著作目録」を欠く)、及び「再版後記」(著者)。</p> <p>3.「廃市・飛ぶ男」新潮文庫版。昭和46年(1971)6月刊。「解説」(清水徹)。</p>
1	「世界の終り」初版後記	福永武彦	福永武彦全集 第4巻より (新潮社)	1959/05	2	<p>「鬼」や「未来都市」は、多くの読者を予想し得る雑誌に注文されて書いたもので、難解だとか高級だとか言われる筋のものではない。と言って、僕は「影の部分」や「世界の終り」が高級だと言うのではない。つまりその両者の間に、決して作者は区別を立てたつもりではないと言いたい。読者の側からも、平等に小説として読んでもらえればいい。僕はこの日本語という俗っぽい言葉を操作して、しかも散文という形式で、音楽的に、かつ視覚的に、読者の想像力を喚起するような作品を書きたいと思う。(中略)</p> <p>この頃、小説を書けば書くほど孤立感が僕を襲う。一体誰が分ってくれるのだろうかと考えることがある。しかし小説家である以上は読者を最後の頼みの綱にする他はないのだし、僕も結局はそこに舞い戻って自分の気力を奮い起こすのだ。それがこうした短篇集を編み、かつこうした無くもがな後記を書き足す理由なのだ。僕が決して技巧上の実験のためにのみ、批評家を幻惑させるためにのみ、小説を書いているのではなく、心の奥底に人すべての持つ深淵を持ち、それを常に覗き見ながら、この無意識なものを虚構の世界に写し取ろうと努力していることを、読者は、僕の愛する読者は、理解してくれるだろうか。(引用)</p>
2	「世界の終り」新版後記	福永武彦	福永武彦全集 第4巻より (新潮社)	1969/07	1	<p>初版の後記で悲しげなことを言っているが、あれは批評家に対する犬の遠吠えのようなもので、作者には秘かに自負するところがあつたに違いない。(中略)</p> <p>その頃私は腕ならしのために専らこういう中篇や短篇ばかり書いていた。そのために少々腕まくりをしすぎて肩が凝っていた。批評家に何と言われようと自身さえあればそれでいい筈なのに、我ながら臍甲斐なかったようである。</p>
3	福永武彦全小説 第4巻 序	福永武彦	福永武彦全集 第4巻より (新潮社)	1974/01	3	<p>私は相手が文藝雑誌だから高尚だというふうには考えなかったから、どんな場合でも牛刀を以て鶏を割いた。(中略)</p> <p>一体私は純文学以外は認めないような偏狭な文士では毛頭ないが、特に意識しての場合の他は、純文学しか書いたことはない(そのような場合にはペンネームを用いた)。この純文学というのは我が国特有の表現だが、私にとって純というのは、たとえば純粋詩という言う時の純である。或いはまた純粋小説の純と言えば更に近い。というのも私の意図しているものが純粋小説に他ならないからである。しかしここで説明したり議論したりすることではないだろう。</p> <p>従って「未来都市」のような、ややSFまがいの作品も、私にとっては純文学に属する。この作品は昭和34年4月号の「小説新潮」に掲載されたから発表順に並べればずっと後になるが、それを書いた昭和32年6月の日付に従ってここに置いた。「別冊文藝春秋」から面白いものを書いてくれと注文されてこれを書き、難しすぎるというので不掲載になり、では「文学界」に(同じ編集部が兼ねていたので)どうかと頼んだら、今度は易しすぎるとか面白すぎるとかの理由で、これまた用いるところにならなかった。私は2年間寝かせてから、これを「小説新潮」に載せてもらった。今から考えても腹が立つようである。(引用)</p>
4	わが赴くは内宇宙 —My innerspace My desination (「未来都市」論)	星野久美子	文藝空間 第10号 総特集=福永武彦の「中期」	1996/08	10	<p>「未来都市」を肉体ではなく僕>、すなわち僕>の意識世界、インナー・スペース(内宇宙)の物語として解釈し、検討している。未来都市をとりまく城塞を<僕>の頭蓋、構成単位である住民の一人一人を脳の構成単位である<ノイロン>に読みかえ、<僕>は一本の認識パルスあるいは自我ノイロンと化して<僕>の脳の中に分け入る。自己の総体である未来都市の広大な回路内をめぐり、生の総括をなすために。</p> <p>「未来都市」の類縁世界として、逆に悪意の偏向が支配する「冥府」の世界との対比を行い、<死者の眼>という視線と、<病者の心>という倫理を両輪に、「冥府」をはじめ、「影の部分」「告別」「飛ぶ男」のみならず「死の島」「死後」「世界の終り」「風花」「忘却の河」までも包含する大きなサークルに、この作品を置くことは不当ではないだろうとしている。(要旨)</p>

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
5	「冥府」再考 —幻想世界の構造を「未来都市」と比較する	高野泰宏	福永武彦研究 第6号	2001/08	17	<p>本論考は、「未来都市」と「冥府」という幻想世界を描いた二つの作品の共通項として、人間の意志を超えた世界律を抽出し、その違いを論じている。</p> <p>「未来都市」では「神性放射」が世界律を規定し、「冥府」のそれは「暗黒意識」である。福永は「自殺者」に、「超越的な意志は存在しない」と語らせているが、裁判が開かれ、僕に「何か」が、「却下」と叫ばせたりすることから、「冥府」の世界には人間の意志を超える「何か」が存在していることが明らかであり、その「何か」とは「暗黒意識」である。この超越意志が裁判の判決を支配し、「冥府」の成り立ちを新参者に説明することを許さず、「冥府」の世界を研究することを禁止している。この「暗黒意識」の実体は、「冥府」の住民の一人一人に分散された「無意識の悪意」であり、これが裁判という形で世界律を規定している。</p> <p>「未来都市」では「超越意志」と対立するという構図が成り立ち得るが、「冥府」では「超越意志」が住人の意識に分散して存在するため、それとの対決は深刻な自己矛盾を引き起こすことになり不可能である。(要旨)</p>
6	「未来都市」について	渡邊啓史	福永武彦研究 第7号	2003/4/1	12	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台設定(全体の枠組み)はハックスリーの「すばらしい新世界」を継承しつつ、具体的な構造はライブニッツによるという設定は意図的なものだっただろう。 ・「面白いものを」という依頼で書かれたことを考慮すれば、福永はここでいわば文学的な「遊び」としてハックスリーの古典的な反ユートピア小説に対抗して、独自の反ユートピア小説を試みたのではないか。 ・ライブニッツの「予定調和」説との関連。全体主義—予定調和—ライブニッツ ・「僕」とローザが未来都市から脱出する場面に強く提示されているのは、おそらくオルフェウスの地獄降りの神話であり、「未来都市」こそは「冥府」であり、二人の恋人たちが漕ぎ出す夕暮れの海は、実は「冥府」を取り巻く「忘却の河」に他ならない。 ・「未来都市」は、一貫したイメージの下に組み立てられており、オルフェウス神話という「補助線」はその構成の多くの伏線を説明する。本作はオルフェウスの主題による反ユートピア小説の試みに他ならない。 ・ハックスリーの反ユートピア小説の題名はシェイクスピアの「テンペスト」からとられているが、福永もハックスリーを意識して、支配者の了解のもとに異界から脱出する恋人たちの物語である「テンペスト」をも念頭に置いていたことも考えられる。
参考	<p>(関連作品)</p> <p>Brave New World すばらしい新世界(1932)／オルダス・ハクスリー</p> <p>O, wonder! How many goodly creatures are there here! How beauteous mankind is! O brave new world, That has such people in't!</p> <p>なんてすばらしい！ りっぱな人たちがこんなにおおぜい！ 人間がこうも美しいとは！ あ、すばらしい新世界だわ、 こういう人たちがいるとは！ (小田島雄志 訳)</p> <p>シェイクスピア「テンペスト」より</p>					<p>近未来での徹底した管理社会を舞台にした作品。</p> <p>この未来世界では、人間は母体を介さずに人工受精により、人工孵化器から誕生し、保育室まで完備した「生産工場」で、社会の需要に応じて、その労働に必要な知能、適正能力を持ったクローン人間として計画的に作り込まれます。そしてこの時に、能力のレベル別に、α、β、γ... という階級に分別され、各階級の中もさらに細かく分類されていますが、幼児の時から潜在意識への暗示教育により不平・不満がなく、各人が満足しているので階級間の対立も生じていません。</p> <p>結婚という制度がなく、従って家庭というものがないので親子の葛藤もなく(この世界では、死語となっている「母」という言葉が、汚らわしく忌むべきものとして扱われている)、愛は不特定多数の異性を対象とした気晴らしのためにしかないから、わずらわしい恋愛関係もなく、TVやスポーツ、政府から支給される麻薬ソーマ(soma)もふんだんにあって、いやなことに悩むこともない、という具合で、暗示教育により本人が管理されているという意識がなく、生活に不平・不満がないので、住民にとっては疑いなく「すばらしい世界」となっています。</p> <p>エリート階級であるαクラスに属するバーナードは、休暇でニューメキシコの未開保存地域を訪れ、母から生まれた青年ジョン(野蛮人と呼ばれる)と母リンダを連れて帰ります。リンダは、ずっと以前にやはり休暇でこの地にやって来た新世界の人間で、旅行中に連れとはぐれて戻れなくなってしまい、その後現地人との間に生まれたのがジョンでした。</p> <p>新世界に連れてこられたジョンは、たちまち新世界で人気者になります。しかし、ジョンの方は新世界の様子がわかってくるにつれ、違和感を感じ始め、やがてそれは絶望へと形を変えていきます。</p> <p>小説のハイライトの一つである、この新世界の統括者(Controllor)であるムスタファ・モンドとジョンとの対話の場面で、かみ合わない議論の末、ジョンは管理された幸福より不都合を欲する、そしてまた神を、詩を、真の危険を、自由を、善を、罪を欲するのだと言い、それに対し統括者が「それでは君は不幸になる権利を主張しているんだな。.... だったら好きなようにするさ」と応答する。</p> <p>(HP「ペーパーバックと音楽」より)</p>